

編集室

* 書店の平積みコーナーに数学関係の解説書が並んでいるのを目にすることが最近多い。“美しい数学”、“ガウス”、“フェルマー”などがタイトルに入った一般向けの解説が、書店の中でも目に付きやすい場所に置かれている。日本人著者の本もあるが、外国人著者の翻訳本も結構多い。数学者が長年挑戦してきたフェルマーの最終定理の証明や、暗号への関心の高まりなど、最近の状況が数学への注目が高まっている背景なのかもしれない。

* 日本人作家の小説では、少し前になるが小川洋子著「博士の愛した数式」は映画化もされ有名になった。中心となる登場人物は、記憶に障害を持つ数学者の博士、その家にお手伝いさんとして働く主人公、その子供（博士が付けたあだ名が、ルート）の3人である。博士以外は、数学の素人であり、この小説の読者も数学のプロではない人を想定している。ところが、小説の骨組みを支える数式は、ガウスの定理、

$$e^{i\pi} = -1$$

であり、この数式の雰囲気というか意味合いをなんとなく感じ取れる気分に読者を誘ってくれる。私も含め理系の人は、

数式を論理的に理解しようとする傾向にある。論理的に理解する姿勢が当然と思い込んでいる我々には、数式の情緒的な説明（解説）は、新鮮に映る。ガウスの定理の e と j と π が、主人公のお手伝いさん、博士、ルートに重ね合わせられ、この小説のストーリーの中から、ガウスの定理を感じられた気分になれる。

* 証明することは、数式をどれだけ理解したといえるのだろうか、ふと考えさせられる。感情の生き物である我々にとって、数式から感情を抱けるのであれば、それもある種の理解かもしれない。何かこの編集室の文章まで空想的になってきたが、数学を応用する立場の技術者にとっても、数学を感覚的に利用するセンスが、役立つことや必要になる場合があるようにも思う。

* 数学の中で重要な位置を占める素数 (prime number) を特集した本号が、会員の皆様にも時流に乗った企画と映れば幸いである。6月になり梅雨も近い。雨音でも聞きながら、素数を感じてみたいものである。

(編集理事 山本浩治)